

令和7年度 江戸川区立平井東小学校 学校関係者評価報告書（学校経営計画・学校関係者評価シート）

学校教育目標	◎考える子ども ・助け合う子ども ・じょうぶな子ども ・進んで取り組む子ども	目指す学校像 目指す生徒像 目指す教師像	・子供たちが「生き生きとした表情で生活する」学校 ～笑顔で登校、笑顔で下校～ ・「人にやさしく 自分につよく 明るく元気な」ひがしっ子 ・児童一人一人の心に寄り添う教師 ・自らの資質能力を高めることができる教師
前年度までの本校の現状	成果 ・校内研究を通して、自分の考えをもって学習に取り組む児童が増えた。 ・教科担任制や外部講師を招いた授業を展開することで、学習の深まりや豊かな心を育成することができた。 ・教員間による自己研修の時間を設け、進んで資質や能力を高めることができた。	課題	・「特別支援教育」を充実させ、支援を要する児童の支援や指導の体制を見直し、教職員で共通理解をはかる。 ・ICT機器を用いた更なる授業展開の工夫を行う。

重点	取組項目	具体的な取組内容	数値目標	達成度		「中間」自己（学校）評価(A～D)		「中間」学校関係者評価(A～D)		「年度末」自己（学校）評価(A～D)		「年度末」学校関係者評価(A～D)		次年度に向けた改善案
				9月	2月	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	
学力の向上	○授業改善の推進、学習の基盤となる基礎・基本の確実な習得	・EDOSクの実施（各学年週1回、総計90回） ・study weekにおけるドリルパークの活用	・EDOSクへの登録率95%以上 ・ドリルパークの活用率90%以上	60	100	A	・EDOSクへの登録率は95%以上となった。 ・学期の入れ替えの際にも95%を超えるように準備を行う。 ・Study Weekにおいては90%以上の活用が見られ、各クラス1時間以上行うことができた。	A	・外部委託のEDOSクは、効果が出ているように感じる。放課後に、学校の先生以外に教わるという取組は、気持ちが切り替わって意欲につながるのではないかと。	A	・EDOSクの登録率は年間を通して95%以上となっている。また、study weekの期間に集中的にドリルパークを活用し90%以上を達成した。	A	・年間を通して高い登録率と利用率が維持されたことは素晴らしい。次年度もこの意欲を持続させてほしい。	・現在の高い利用率を維持しつつ、個々の習熟度に合わせた課題の設定など、学習の質の向上を図っていく。
	○家庭学習習慣に対する学校の組織的な対応による取り組みの実施・充実	・毎週水曜日10分間の朝学習の全校実施（高学年における、よむYOMUワークシートの活用、学習カルテの活用）	・児童アンケートで80%以上が学習意欲や読解力が高まったと回答	40	60	B	・11月の児童アンケートに向けて学習意欲や読解力が高まったと感じられるように毎週水曜日に確実に実施することができた。	B	・よむYOMUワークの取組は知らなかったため、学校だより等で紹介してもらったのではないかと。家庭でも考える時間が取れそうである。	B	・今年度の児童アンケートでは、子供たちが自分の考えを伝えたり聞いたりする活動に対して85%以上が前向きに答えている。よむYOMUワークシートの活用は70%が肯定的だったが意欲の二極化が進んでいる。	B	・「よむYOMUワーク」などの取り組みにより、多くの児童が前向きに取り組んでいる点は評価できる。一方で意欲に差が出ている点も気にとり、家庭と連携したフォローを期待したい。	・意欲の二極化に対して、個別の動機付けやフィードバックを増やしたり、成果を可視化したりすることで成長を実感できる工夫を行う。
	○読書科の更なる充実	・探究的学習を全学年学期1単元以上を実施 ・読書郵便の作成	・巡回図書と連携した授業を学期に1単元実施 ・読書郵便を読書月間に合わせて作成	・50 ・60	60	B	・すべての学年で巡回図書と連携した授業を実施。2学期も継続して行っている。 ・あさがお読書月間において教員のおすすめ本を紹介した。2学期には読書郵便の活動を行う予定である。	A	・図書室が整備され、おすすめの図書なども紹介されている。ICTの時代だが、本が好きなお子を見て育てることは大切。	B	・図書室の電子化が完了し、巡回図書と連携しながら円滑な指導ができた。しかし、巡回図書が火曜日のみが勤務だったため全学年での授業連携を行うことができなかった。読書月間に合わせて読書郵便は全学年で行うことができた。	B	・図書室の電子化や読書郵便など、環境整備が進んだことを評価する。巡回図書の不在時でも担任を中心に充実した指導を行えるように工夫してほしい。	・巡回図書が不在の日でも充実した読書指導ができるように読書科ノートを活用しつつ教員間の指導ノウハウの共有を進める。
体力の向上	○個に応じた体力向上のための取り組みの実施・充実	・学期に1回のなわ跳び週間の設定 ・校内なわ跳びギネスの実施	・なわ跳び週間への全校児童参加 ・なわ跳びギネスへ3回以上の参加	60	60	A	・学年で実施時間を割り振ったことで全学年が空きの余裕をもち、取り組むことができた。 ・1回目のなわ跳びギネスを行った。2学期と3学期にも1回ずつ行い、年3回行う。	A	・個々のタブレットで縄跳びの動画を見ることができるので、新しい技に挑戦する気持ちが高まっている。	A	・なわ跳びへの意欲を高めるためにギネス表が更新できるように掲示したり、行間遊びでの運動でもなわとびを取り入れたいと考えている。	A	・ギネスへの挑戦や動画の活用など、子供たちが楽しみながら運動できる工夫がなされている。	・今後も児童が楽しみながら体力向上に向けた活動ができるように取り組み方法を工夫していく。
	○運動意欲や基礎体力の向上	・業間休みを活用した運動遊びの実施	・火曜日を中心に学期に5回～8回程度実施	60	70	A	・1学期は天候にも恵まれ10回の実施となった。今年度は形式を大きく変えて、児童が自分の課題に合わせて唐を選び、活動するようにして、意欲の継続と体力向上に繋がりやすい工夫を行った。	B	・熱中症の心配があり、外遊びができない日が多いという点が心配である。基礎体力の向上に関して、今後、対策を考えていかなければならないのではないかと。	A	・学期ごとに運動内容の改善を図り、児童が継続して楽しめる内容の工夫を行った。	A	・気候や天候に左右されやすい中、児童が楽しみながら取り組めるよう内容を工夫した点を評価したい。引き続き工夫を期待する。	・活動内容を定期的に変化させながら新鮮な気持ちで活動に取り組むことができるようにしていく。
教育の推進 共生社会の実現に向けた	○ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の実施・充実	・巡回指導や特別支援教室専門員の活用、日本語指導員との連携	・特別支援専門員による各学級の支援（適宜）	60	80	A	・特別支援専門員を中心に、巡回指導員やSC、SSW、心理士と連携した指導を行うことができた。日本語指導においては児童の日本語の向上が見られている。また、各学級の支援にも入ることができている。	B	・ユニバーサルデザインに関しては、どのような取り入れられているのかが分かっていない。SCの予約が取りにくいと聞き、週1回の配置では少ないと思った。	A	・特別支援専門員を中心に連携した指導を行うことができた。日本語指導員の配置数も増え、児童や保護者の不安を取り除く環境が整っていると感じる。	A	・日本語指導やUDL授業の公開など、個に応じた指導が充実している。専門員との連携により子供たちが安心して過ごせる環境が整っていると感じる。	・通常学級におけるUDLの視点を取り入れた授業改善を全学的に広げたい。 ・日本語指導が必要な児童の増加を見据え、翻訳ツールの活用や支援体制の効率化を図る。
	○副籍交流、交流及び共同学習の実施充実	・副籍交流の実施 ・年間指導計画に基づいた特別支援学級との交流及び共同学習の実施	・年に2回の副籍交流 ・3年生を中心に年に5回程度、特別支援学級との交流学習を実施	40	100	B	・副籍の担当者同士で2学期の副籍交流に向けて打ち合わせを行っている。 ・2学期から特別支援学級との交流学習を年間指導計画に基づいて進めていく予定である。	A	・特別支援学級との交流は、両者にとって学びなるとてもいい取り組みだと感じる。学校公開で参観したい。	A	・副籍交流は学期に1度行うことができていた。2学期には交流に加えて学習発表会を参観し、特別支援学級との交流授業においても計画通りに行うことができた。	A	・計画通りに交流や共同学習が実施され、児童にとって学びのある活動となっている。互いの理解を深めるため、今後も継続・発展させてほしい。	・直接的な交流に加えて、ICTを活用した日常的な交流を検討していく。 ・学習発表会などの行事交流を継続する。
不登校・いじめ対応の充実	○L-Gateの活用	L-Gateの活用により児童の心理状態を把握	・毎日の記録の実施と確認を毎日行う。	50	60	B	・5・6年生において毎日の記録の実施を始めた。1～4年生は2学期から行っている。今後、児童の変化を見取るための一助としていく。	B	・L-Gateのような取組は、企業の人事課でも積極的にやっている。児童の状況を早めに察し、適切な声掛けができると良い。	B	・L-Gateを活用し、児童の変化に気づき、適切な対応ができるようにしていく。	B	・ICTを活用して子供の心の状態を客観的に把握しようとする姿勢は重要である。変化があったときに声掛けができている点を評価したい。	・L-Gateの結果と教員の観察を照らし合わせながら、より早期の予兆発見に繋げていく。
	○いじめ・不登校対策の実施・充実	・いじめ・不登校の早期発見 ・解消件数の増加（早期解消を目指す）	・年3回のアンケートの実施 ・学期1度の生活指導全体会の実施	60	90	A	・全学級においてアンケートを実施して、いじめや不登校の早期発見に努めた。 ・生活指導全体会において個別の配慮が必要な児童への対応を全職員で共通理解することができた。	A	・旗振りをしていて、担任、養護教諭、管理職の先生たちが教室に入れない子の対応をしている様子が見られる。 ・全く登校できていない児童がいないことは素晴らしい。	A	・エンカレッジサポーターの配置を進め、エンカレッジルームの活用を本格化したことで不登校傾向の児童が登校できることが増えている。	A	・エンカレッジルームの本格運用により、教室に入れない児童への支援が手厚くなった。SCやSSWなどの専門家と連携し、組織的に対応できている点は心強い。 ・保護者が気軽に相談できる機会をさらに増やしていく。	・エンカレッジルームを利用する児童の「教室復帰」だけでなく、その先の生活を見据えた支援ができるようにする。 ・保護者が気軽に相談できる機会をさらに増やしていく。
	○教育相談の強化	・SC、SSWとの連携強化	・特別支援校内委員会の月1回の実施	60	80	A	・月1回、特別支援コーディネーターを中心に校内委員会を実施している。個別に配慮が必要な児童への対応をSCやSSWと連携して行っている。	A	・tetoruでSSWについて情報が送られてきた。外部の専門家の力を借りることは今後も必要であると考える。	A	・SC、SSWと担任が児童への支援について連携して対応することができた。	A	・担任だけでなくSCやSSWと連携して組織的に対応できたことは保護者にとっても大きな安心材料である。複雑化する児童の課題に対して専門家の知見を取り入れる体制が定着している。 ・相談のハードルをさらに下げるためにSCやSSWの役割や相談事例を保護者に周知する。	・相談のハードルをさらに下げるためにSCやSSWの役割や相談事例を保護者に周知する。 ・教職員向けのケース会議を充実させて組織的な対応力を高める。
学校（園）の実現 地域社会に開かれた	○自校の取り組みの積極的な発信	・学校ホームページの充実、学校公開の実施・充実	・各学年、月に1回程度、行事を中心に配信	40	80	B	・行事の様子を配信することができた。 ・第1回目の学校公開を行い、授業の様子を全学級で公開した。 ・月に1度、学校だより・学年だよりをHPにて配信した。	A	・学校公開には多くの保護者が参観に来ていて、学校の様子は分かってくれていると感じる。 ・ひがしっ子まつりもチケット申し込みが多いので、盛況が期待される。	A	・行事の様子を配信することができた。 ・全3回の学校公開を行い授業の様子を公開することができた。 ・月に1度、学校だより・学年だよりをHPにて配信した。	A	・年3回の学校公開や毎月のHP更新、掲示板の活用により、学校の様子がよく伝わってくる。開かれた学校づくりへの意欲を感じる。	・HPや学校だよりの発信に加えて児童自身が学校の魅力を発信する活動を検討する。
	○学校関係者評価の充実	・児童、保護者、地域、教職員へのアンケート調査の実施	・年3回の土曜公開や各行事後にアンケートを実施	40	60	B	・Formsを使用して学校公開や行事後に保護者へアンケートを実施した。今後はアンケートの回収率がさらに上がるように呼びかけを行っていく。	B	・アンケートの結果を知り、学校とともに次年度の改善策を考えていきたい。	A	・アンケートの電子化を進めたが回収率が下がっている現状がある。Tetoruを活用し締め切り前に回答を呼びかけて回収率を上げられるように工夫する。	A	・アンケートの電子化は便利だが回収率低下は課題である。保護者が「回答したい」ともえるような発信や結果のフィードバックを工夫してほしい。	・アンケート結果や学校としての改善策をできるだけ迅速に公表することで、アンケートが学校の教育課程に反映されていることを実感できるようにする。
教育の展開 特色ある	○環境教育の推進	・年間計画に基づく荒川環境学習、外部講師の活用	・学期に1度程度、4年生を中心に荒川環境学習を実施	60	70	B	・1学期には4年生が荒川学習（干潟の環境・生き物）を1回実施した。暑さの関係で土手での活動ができなかったため来年度は実施時期を調整するようにする。	A	・荒川学習は児童にとって有意義な活動だと感じる。もっと全面的に取組を紹介してもいいのではないかと。	A	・2学期に2回実施することができた。有意義な活動となった。全校に活動を紹介する機会があると良かった。	A	・猛暑の影響で時期調整が必要だったものの2学期に実施でき児童にとって有意義な体験となったことは喜ばしい。この地域の特色を活かした重要な学習活動である。	・SDGsの視点を取り入れて地域環境から地球規模の課題へと視野を広げる学習に発展させる。
	○働き方改革の推進	・定時退勤日の設定	・区小教研の日、それ以外に月1回程度の定時退勤日の設定	60	60	B	・区小教研の日、それ以外に月1回の定時退勤日を設定している。今後は定時に退勤できるようにするための業務量の整理を意識していく。	B	・教員の働き方が世間でも注目されているが、実情は分かっていない。 ・土日のPTA行事との関わりも考えていかなければならない。	C	・定時退勤日の設定は意識づけになり、一定の効果は見られたが全員が定時退勤をするためには更なる業務の整理が必要である。 ・土日のPTAの会議等は管理職を含め教員は参加しない方向にできると良い。	C	・定時退勤日の設定など意識改革は進んでいるが、まだ業務量が多い印象を受ける。先生方が児童と向き合う時間を確保するためにも、一層の業務精選を進めてほしい。	・会議時間のさらなる短縮に努める。 ・保護者・地域への理解を求めつつ、行事の精選を進めていく。
	○教員研修の実施	・教員の組織的な育成	・年に2回程度の授業公開 ・年に10回程度のOJTの活用	60	90	A	・校内研究や自己申告における授業をお互いに公開し、自己研鑽に励んでいる。 ・OJTは1学期は3回行うことができた。計画的に進めることができた。	B	・授業、生活面ともにしっかり見て欲しいと保護者は願っている。 ・担任だけではなく、学校全体で指導してくれていることは感じている。	B	・OJTや授業公開を計画的に実施し、先生方が互いに学び合う姿勢が見られる。多忙な中でも業務向上に努めていることは児童の成長に還元されると信じている。	B	・若手教員の育成やベテランの経験継承を両立させるためにメンター制やペア研修などを検討する。	